

令和5年度・令和6年度「ちばっ子の学び変革」推進事業研究成果報告書

鎌ケ谷市立初富小学校

研究主題

主体的に解決方法を考え、課題解決することができる児童の育成

1 学校の概要

本校は、鎌ケ谷市の北東に位置しており、1973年に創立した小学校である。児童数は490人、学級数は20学級である。学校名にもある「初富」は、明治初期に牧を開墾されたとき、一番初めに開墾された場所であることを表している。学校教育目標のほかに、「学び合い、鍛え合い、助け合い、励まし合い、元気なあいさつ」の「5つの合い」があり、児童、保護者、職員をつなぐ合言葉になっている。保護者や地域の方々と連携しながら教育活動を行っており、昨年度に創立50年を迎えた。

2 研究の概要

(1) 児童の実態と課題

令和6年度の全国学力・学習状況調査の分析に加え、これまでの研究や指導からわかる本校の児童の実態と課題は次のとおりである。

- ① 令和6年度全国学力・学習状況調査や鎌ケ谷市の学力調査の算数科における正答率は、昨年度と同様に県及び市の平均を下回る結果となった。どの領域においても課題はあるが、特に「体積の求め方」「データの活用」の領域が全国平均を大きく下回っていた。
- ② 児童質問調査からは、「問題が解けたとき、別の方法を考えようとしている」や「課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」「自分の考えがうまく伝わるように工夫して発表している」の項目では、全国平均を上回る結果となった。しかし、「算数で学んだことを日常生活に活かす」や「わからない問題があったら、考えて解決方法を探す」の項目において全国平均を下回っている。

以上のことから、「自分で考えて解決方法を探そう」としたり、「自分の考えを工夫して伝えよう」としたりする態度や意欲が高まってきていることがわかる。実際の授業においても、意欲をもって取り組んでいる児童が多い。これは、これまで「児童同士をつなぐ言葉がけ」や「思考を揺さぶる発問」などに重きを置いて校内研究を行ってきた成果であると考えられる。

しかし、算数の授業を生活に生かそうとしたり、学習に粘り強く取り組んだりする力に課題があることが言える。また、このことが学習した内容が定着しない要因の一つであると推測できる。

今年度は、児童の実態と課題、これまでの研究を踏まえ、今まで以上に、本校研究主題である「主体的に解決方法を考え、課題解決する力」を高めることに重きを置く。そのために、次の二つの視点から授業改善を行っていく。

- ① 『「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラム（千葉県教育委員会 2021）』の活用（図1）
- ② 「児童の学びを考え、児童一人一人が考えをもてるような発問の工夫」



図1 実践モデルプログラム

(2) 学力向上のための取組

【研究仮説】 一人一人が考えを持てるように**発問を工夫**することで、
主体的に課題解決する児童になるだろう

4月に、本仮説を「一人一人が考えを持てる」と「発問の工夫」の大きく二つに分けて考え、それぞれの解釈を職員に示し、考えを共有した。また、指導主事からも指導を受けた。

その上で、学習者視点の発問の工夫を行うことが、児童の算数の見方・考え方を揺さぶり、「なんで」「どうして」を引き出し、児童の主体的な課題解決に向かうであろうという考えを共有した。(図2)

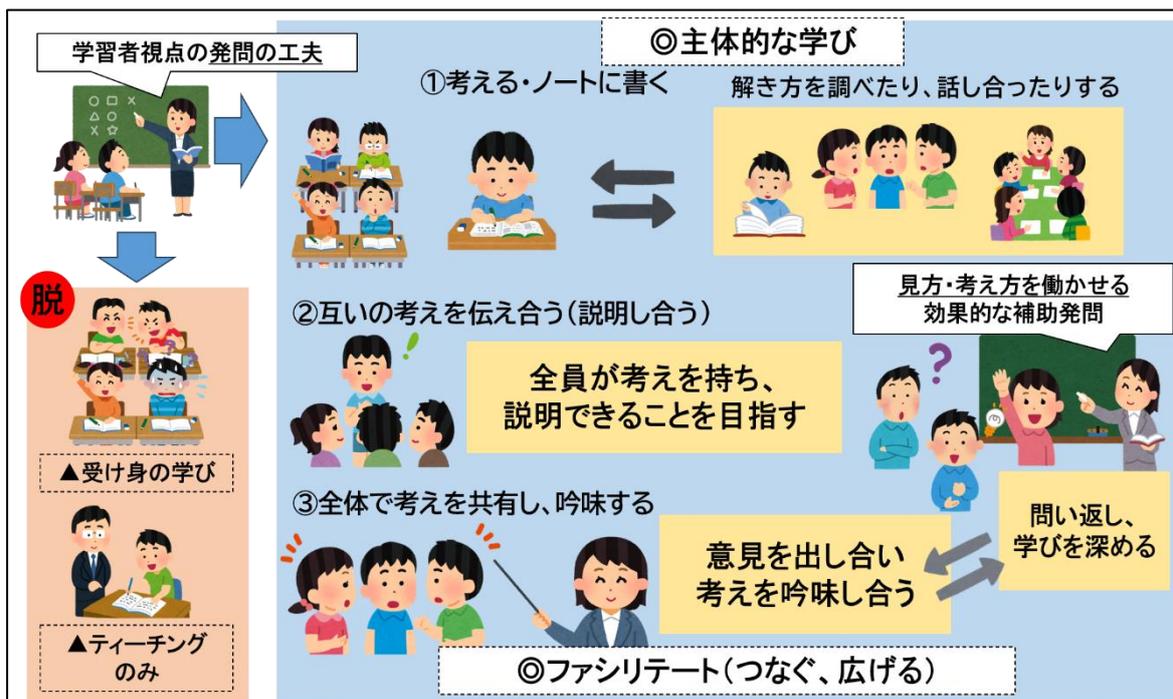


図2 算数科における授業改善イメージ

本校の研究では、以上のことを踏まえ、仮説に迫るための「I 校内授業研究会での実践」と、児童の学習意欲及び学習習慣の向上を目指すための「II 校内授業研究会以外の実践」に取り組んだ。

I 校内授業研究会での実践

全学年で実践モデルプログラムをもとに授業を展開している。その中で児童が主体的に課題解決するような発問の工夫を行う。ここでは、第6学年「データの活用」の授業における実践から二つ紹介する。

A 従来(指導書)の単元構成							
1	2	3	4	5	6	7	...
1組のデータの特徴について話し合う	3クラスのデータをもとに平均値とちらばりについて知る	ドットプロットにまとめる	度数分布表にまとめる	ヒストグラムにまとめる	表にまとめ、優勝を予測する	賞をつくる	...
B 今回実施した単元構成							
1	2	3	4	5	6	7	8
4クラスのデータをもとに「どこが学校代表に相応しいか」を考え、立場を決める。	立場毎にデータの特徴を調べる。	調べたことをもとに話し合う。	第4時の話し合いを受けて、改めてデータの特徴を調べる。	調べたことをもとに話し合い、自分なりの結論を出す	調べたことをもとに話し合い、自分なりの結論を出す	データの特徴を調べる際に用いた方法を確認する	...

図3 単元構成の工夫

① 単元構成の工夫	<p>単元の中で話し合い活動をどこに位置付けるかによって、子どもたちの学びも大きく変わってくる。単元の最後に話し合いをすることがあるが、その場合はすでに分かっていることを話し合う復習になってしまうことが多い。本単元では、前半に話し合いを入れることで、子供たちの学びをよりダイナミックにしようと考えた。その結果、子供たちは、「学んだこと」ではなく「必要なこと」を考えて話し合いに臨むようになり、子供たちのこれまでの経験やそれぞれのもっている知識・考え・既習事項から派生し、発展的な学習となった。(図3)</p>
--------------	--

② 単元全体を貫く「発問」の工夫	<p>(ア) 授業の導入における発問の工夫</p> <p>上記の①で示したような単元構成のもと授業を実践するためには、導入の発問は単元全体を貫く学びの軸となるものである必要がある。単元全体を通して考えられるよう、本授業では「学校代表にふさわしいのは何組であるか」と問うこととした。</p> <p>その結果、自分の意見を伝えようと主体的に計算をしたり、表や図を書いたり、友達と話し合ったりしている様子が見られた(図4)</p>	
	<p>(イ) 授業の終末における発問の工夫(ゆさぶる発問)</p> <p>第1時において、ある程度話し合いが白熱した終末に、「何組が学校代表に絶対にふさわしいと言えるか」と投げかけた。これは、子供たちの思考をさらに揺さぶり、単元の見通しと興味をもたせるためである。この発問を通して、本時だけでは結論が導き出せないということや、「もっと調べる必要がある」ということに気付き、単元全体の見通しをもたせ、学習への意欲を高めることにつながった。</p>	<p>図4 話し合っている様子</p>

II 校内授業研究会以外の実践

児童の学習意欲及び学習習慣の向上を目指すために以下3点の取組を行った。

① 全職員による学力調査の誤答分析会の実施と授業改善

夏季研修として、自校の児童の実態を把握するために学力調査の誤答分析会を実施した。自校児童の「つまずき」を把握した上で、指導に生かすことができるようになり、児童の実態に応じた指導を行うことにつながった。

② 相互授業参観の実施

互いの授業を積極的に参観し合う相互授業参観ウィークを年に4回実施した。授業者は立候補で募り、教科は自由、指導案も略案のみとした。授業の参観も自由とし、途中の出入りも可とした。このように先生方の負担を軽減しつつ、日々の授業の質を高めることができた。

③ 放課後算数教室の実施

昨年度同様、加配教員や地域支援コーディネーターの協力のもと、各学年月2回程度ずつ放課後に学習をする「放課後算数教室」を開催した。主体性を重んじ、参加は希望制とした。多くの児童が参加し、授業で理解しきれなかったことなどを強化する時間となっていた。

(3) 加配教員（学習サポーターを含む）の活用

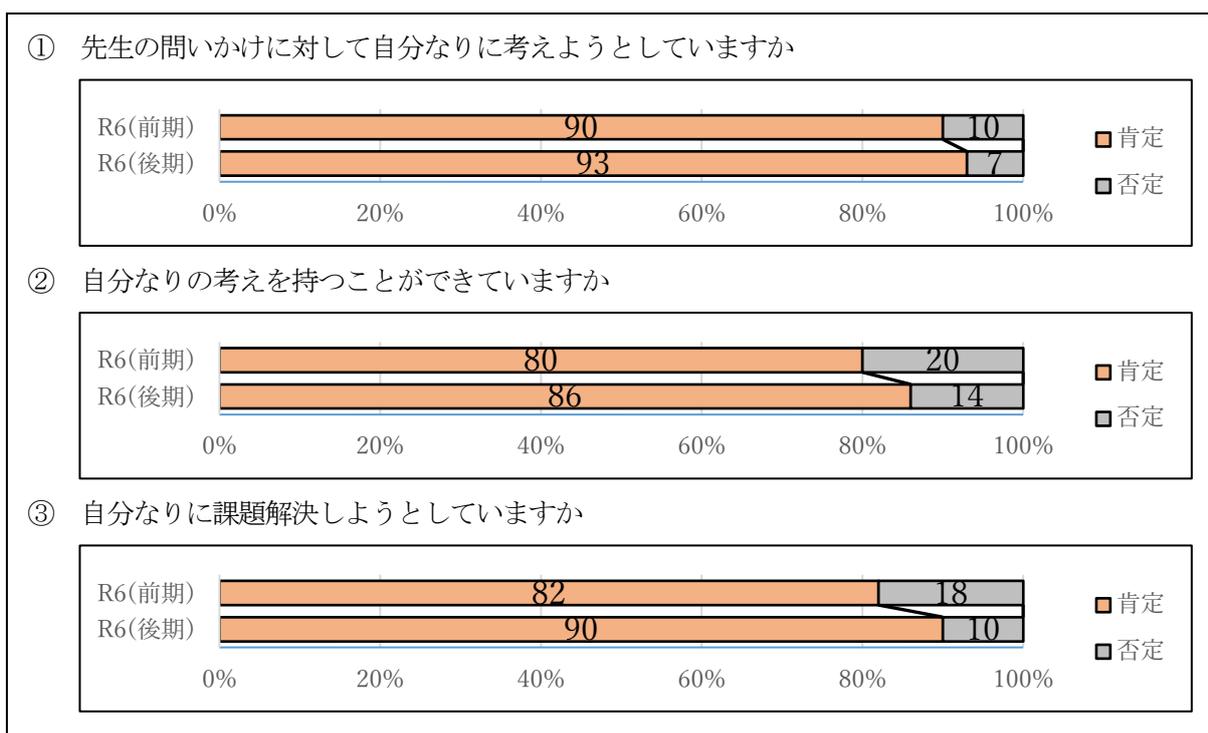
学習サポーターは、T2として授業中の学習支援に当たり、児童の能力や理解に応じた個別指導を行った。T1の教員はT2と連携して指導に当たることで、指導の個別化を図ったり効率的に机間指導や採点業務を行ったりし、より一層きめ細やかな指導につなげることができた。

3 研究の成果

令和6年度全国学力・学習状況調査における〔児童質問調査〕では、いくつかの項目において肯定的に回答した児童が県や全国平均を上回る結果となった。顕著にその結果が表れた四つの項目を以下に示す。※ () は項目番号、【】は全国との比較を示している。

・(17) 自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか。	【+ 5.5】
・(29) ……自分の考えが上手く伝わるよう……工夫して発表していましたか。	【+13.6】
・(30) ……課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。	【+ 8.7】
・(56) 算数の問題が解けたとき、別の解き方を考えようとしていますか。	【+ 6.8】

また、全校児童の変容を捉えるために学習に対する意識調査を今年度の前期（5月）と後期（12月）に校内で行った。次に示す三つのグラフの結果から、児童が主体的に課題解決しようとしてきていることがわかる。



以上の結果からみても、本校の研究主題である「主体的に解決方法を考え、課題解決することができる児童の育成」には一定の成果を得られることができたと考えられる。そしてこれは、これからも必要となってくる身に付けるべき資質・能力であると考えている。

4 今後の課題

算数科における知識・技能の定着及び、思考力、判断力、表現力等の向上には課題が残っている。引き続き、全教科において授業改善を行いながら、学力向上に向けた学びの充実を図っていきたい。